

明治時代には、無鄰菴、対龍山荘、清風荘などの庭園をはじめとして、自然性が高いと評価される新しい庭園様式が形成された。本研究ではこの様式を明治庭園と呼んだ。本研究は、明治庭園の自然性の起源を明らかにすることを目的とした。先行研究では、自然主義や個人主義など西洋から導入された運動や思想と、イギリス風景式庭園の影響が明治庭園の自然性の原因とされているが、これらは推測にとどまっている。そこで、本研究は明治時代の造園書を精査し、明治庭園の自然性とその起源を、当時の人物の発言から明らかにすることを試みた。

本論文は、全4章から成る。第1章では、横井時冬による『園芸考』を分析した。最初の日本庭園史として頻繁に参考されているが、明治庭園の意匠との関係など最初期の近代造園書としてのインパクトは探られていない。『園芸考』で横井は、明治時代の庭園が発展すべき方向を提案するのみならず、日本庭園における自然性や伝説、そして西洋庭園の自然性など、近年の研究で明治庭園に関して議論されている話題を取り上げている。したがって、明治時代に出版された造園書から明治庭園の自然性を明らかにしようとする本研究にとっては、『園芸考』は出発点としてふさわしいと思われる。

第1章では、『園芸考』をその詳細と背景から検討した。まず、最初の日本庭園史でもある『園芸考』は、明治中期の庭園論ならびに現在の庭園論への理解を深める貴重な書物であることがわかった。そして、明治庭園とその自然性についての記述を分析した結果、教育者だった横井は明治の庭師に対して、それ以前の時代に造られた名園を保護し、新しい庭園の見本にするように促していることがわかった。なお、横井は自然性を西洋庭園にはない日本庭園の特徴とみなした。そのうえで、日本の最も自然的な庭園様式として露地をあげ、明治の庭師は規模の大きい露地を造るべきだと主張した。また、横井は陰陽五行思想に基づいた迷信を庭石の配置を決める法則としてあげながら、迷信と伝説の区別をせず、伝説の名称を使用しつつ、この象徴を積極的に批判し、庭園の自然性と対立させた。

また、横井にとっての園芸は現代の園芸とは意味が異なっていたこともわかった。『園芸考』における「園芸」は庭造りを意味しており、数年後の横井の著作では「園芸」は庭造りとともに樹木の栽培や盆栽を含意する、より広い意味をもつようになった。そして、横井のような「園芸」のとらえ方は明治時代において例外的なものではなく、『日本園芸会雑誌』における園芸の解釈を反映していたことも明確になった。したがって、明治庭園の自然性を当時の造

園書から明らかにしようとする本研究には、園芸についての資料をも調べる必要性が浮かび上がり、次章でこの問題に取り組んだ。

第2章の目的は、明治にはまだ分断されていなかった庭造りと園芸の関係の変遷を明確にしながら、園芸にかかわる書名をもつ造園書を整理し、これらを本論の分析対象に追加することだった。時代背景と当時の資料を分析したことによって、造園と園芸が明治時代を通して絡みあっていることが明らかになった。そしてこの時代に刊行された庭造りについての情報を含む「園芸書」として、32個の資料が抽出できた。その中から自然性についての指摘を含む16個の資料を第3章と第4章の分析対象に入れ、第2章で明らかになった園芸の複雑な意味がそれぞれの資料にどのように反映されていたのかを考慮しながら考察を進めた。また、『日本園芸会雑誌』と『園芸之友』から、明治庭園とその自然性についての論文を5個分析対象に追加した。

第3章では、これまで明治庭園の自然性の原因とされてきた西洋庭園に目を向けた。そして、その自然性と明治庭園との関係が、第2章の分析で見つかった庭造りの指摘を含む園芸書を含む、当時の造園にかかわる資料でどのように論じられているかを明らかにした。第1節ではイギリス風景式庭園についての記述を分析し、イギリスの庭園を論じる資料のうちイギリス風景式庭園を自然的だと評価している資料が複数あった。しかし、明治庭園がイギリス風景式庭園から学ぶことで（より）自然的になると主張する資料は見つからなかった。それどころか、従来の日本庭園がイギリス風景式庭園より自然的だと断言した資料もあった。したがって、明治の造園関係の資料の分析からは、明治庭園の自然性がイギリス風景式庭園を起源としたという根拠はないと結論づけられた。

第2節では、明治庭園がイギリス風景式庭園以外の西洋の庭園から影響を受けたかどうかを明確にすることを目的とした。特に西洋の庭園が自然的だと指摘されていたかどうかということと、西洋の庭園を見本にすることで明治庭園がより自然的になると主張されたかどうかの2点に焦点を当てた。1点目に関しては、日本の近代的造園論が始まる明治中期の早い段階に発行された資料では、西洋庭園を不自然なものとして指摘することが主流であり、1890年前後から西洋庭園の自然的なところも部分的、消極的に評価されていることがうかがわれた。明治後期には、西洋庭園は自然的だと判断する資料と、自然的ではないと判断する資料が混在していた。なお、明治中期・後期ともに、西洋庭園の人工性を主張する資料では日本庭園の意匠と西洋の庭園の意匠とを対照的に論じ、これによって前者の自然性を強調する傾向があることがわかった。2点目に関しては、園芸関係の設備、国際と国内の交流、植物の栽培に関する技術などの面では日本が西洋から学ぶべきだという主張があったが、庭園の意匠の面では、田中（1912）を除いて、日本庭園が西洋の庭園から学ぶことによって自然的になるという主張はなかった。

それどころか、日本庭園と西洋の庭園の差異が大きすぎるため、互いに学ぶことはできないと主張する著者もいた。

第4章では、第3章の結果と、第1章で明らかになった自然的な庭園を造るために従来の名園を見本にするべきだという『園芸考』における横井の主張を受け、明治庭園の自然性が、西洋庭園との対照によって注目されるようになった従来の日本庭園の自然性を起源とするという仮説を検証した。その際に、明治庭園で見られる自然性が従来の日本庭園から受け継がれたかどうかということと、明治庭園がなぜ自然的でなければならなかったのかという2つの疑問に答えることを目的とした。まず第1節では、明治以前の造園書で象徴と自然性がどのように表現されていたのかを明らかにするために、『築山庭造伝』の前編を中心に分析を行った。その主な結果として、明治以前の象徴と自然性の具体的な論じ方が明確になり、象徴と自然性が日本庭園に必要不可欠であり、両方とも重視されていたことが判明した。第2節では、明治前期における日本庭園の自然性を明らかにするために、時代背景を検討し、万国博覧会の報告書进行分析した。その結果として、万国博覧会では日本の美術が西洋人に高く評価され、日本庭園も注目を浴びるようになったことがわかった。

第3節と第4節では、明治中期以降の造園書における日本庭園の自然性のとらえ方を明らかにするために、その迷信と伝説としての象徴、また自然性に関する記述进行分析した。結果として、象徴に対しては2つの方向性が浮かびあがった。1つ目は、明治以前の作庭秘伝書における主張を受け継ぎながら、伝説と迷信を詳しく紹介し推奨するアプローチである。2つ目は、象徴の役割を限定的に評価する、あるいは象徴を批判する、あるいは象徴に触れないという形で、象徴を重要視しないアプローチである。1890年代前半までは2つ目の方向性の造園書が多く、1890年代の後半以降に1つ目の方向性の資料のほうが多くなった。明治末期には、2つの方向性が並行して見られた。なお、第1章で分析した『園芸考』における伝説についての指摘を受け、明治庭園で伝説が回避されたことが廃仏毀釈の結果だった可能性を念頭に、象徴を伝説と迷信に分けて分析したが、第3節と第4節では、その背後にある思想によって象徴に対するアプローチが異なるという傾向は見られなかった。

自然性に関しては、明治中期から末期にかけて、自然性に触れない資料は稀であり、以上の象徴に関する方向性にかかわらず過半数の資料では自然性が日本庭園の特徴とみなされていた。1つ目の方向性の造園書では、日本庭園の自然性についての主張が明治以前の作庭秘伝書から受け継がれていた。2つ目の方向性の造園書では、明治中期には明治庭園の発展のために、自然的とみなされる従来の庭園やその庭造りを参考にすることを推奨する傾向がうかがわれた。明治の末には庭園の自然性を従来の庭園の自然性の延長とみなす資料が複数見られた。

なお、1つ目の方向性の造園書では、明治以前の庭造りから自然性と象徴をともに重視する方針を受け継いでいるのに対し、2つ目の方向性の資料では、自然性と象徴を対立的なもののみなし、前者の発展を促しながら後者を批判する資料が複数あった。

このように、明治庭園が発展し始める直前の1890年前後の造園書では、庭園の自然性を主張しながら象徴を重視しないアプローチ、すなわち明治庭園の特徴として指摘されてきたアプローチが主流だった。そして、これらの資料では自然性が従来の日本庭園の自然性に基づくべきだとされていた。このことと明治末に明治庭園の自然性が従来の庭園の自然性の延長とみなされたことを併せて考慮すると、明治の造園書においては、明治庭園の自然性が従来の日本庭園を起源としていたと結論づけられた。なお、日本庭園が自然的でなければならなかった理由としては、日本庭園は明治時代に国際的な環境に置かれ、西洋庭園と比較されるようになった結果、自然性を特徴とする庭園として意識され、その自然性が芸術的・文化的・経済的な財産として評価されるようになったことが考えられる。その際、日本庭園の自然性は、人の精神と物質界の分離を合意する新しく西洋から入った自然のとらえ方から解釈されたはずである。それによって、庭園の人工性を高める象徴は、当時国際的に評価されていた自然性と対立するものとして意識され、庭園から排除される必要性が生じたと推測できる。

本研究で造園書を分析するに当たって、明治庭園の自然性という本題から少し離れた成果もあった。なかでも、横井時冬の『園芸考』を日本庭園論の中に改めて位置づけ、現代の日本庭園史の叙述のルーツがこの資料にあることを明らかにしたことは重要な結果である。この叙述を時代別様式叙述と呼び、時代ごとに日本庭園の変遷を論じること、各時代の庭園の特徴をまとめ様式を提唱することという2つの特徴を持つことを明確にした。そして、庭造りと園芸について、園芸がロブシャイドの『英華字典』（1866-1869）を通じて現代と近い意味で日本に入った時点から、園芸学会と造園学会が創設された1930年代にこの2つの分野が切断される時期まで、両者の関係の変遷を明らかにした。また、明治の庭園関係の資料を整理しなおしたことも本研究の重要な成果の1つである。本論文以前では、1971年出版の重森三玲・重森完途著『現代の庭（一）』における「明治時代の庭園書関係の一覧表」が最新の試みであり、更新、追記、訂正が必要不可欠だった。最後に、1912年4月に発行された杉本文太郎の『西洋庭造法図解』を、西洋の庭造りを主題とした最初の日本語による単行本として位置づけたことも成果としてあげられる。